
紅い雪

マツダサトリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅い雪

【Nコード】

N9292F

【作者名】

マツダサトリ

【あらすじ】

紅い髪、紅い目の新入生代表・甲斐天瀬。彼に一目惚れした都だが、彼は予想を遥かに越えた人間嫌いではない？

綺麗な男の人。

そう、素直な気持ちで思った。

新入生代表として壇に上がった同い年の彼は、それはそれは見事な紅い髪をしていた。

基本的にこの学校の校則では髪の色に関しては厳しく言っていない。だが新入生で、しかも代表ということは入試トップの優等生のはずなのに、真紅の髪なのだ。

そしてよく見れば真紅の瞳でもあった。

「キレー……」

半ば呆然としながらそう新入生代表を見つめていた都だが、回りはあまりにも派手な容姿にザワザワと騒ぐ。が、壇上の彼はそんなこと気にしていないのか淡々と新入生代表の挨拶文を読んでいく。とてもとても、面倒臭そうな態度で。

『新入生代表、甲斐天瀬』

最後に自分の名前を言って終わった新入生代表挨拶。その声をずっとうつとりとした表情で聞いていた都だが、周囲はまだザワザワと騒いでいた。

あまりにもけだるげに挨拶文を読む姿は確かに何だあれ、的なもの

を感じなくはないが、都はただただうつとりするだけ。

所謂、一目惚れだ。

「甲斐天瀬君かあ……」

お友達になれるといいな。

そう笑顔で考えた都だったが、現実はそのような甘いものではなかった。というよりも、完全に外見で甲斐天瀬という人間を勘違いしていた。

甲斐天瀬。

彼はそう、今まで見たことのないそれはそれは孤高の人だったのだ。

甲斐天瀬。

その人がどれだけ非情か。

わずか一週間でそれが学校全体に伝わった。

告白。

プレゼント。

誘い。

全てを拒絶する甲斐天瀬は相手を完全に蔑み、睨みつけ、そして通告するのだ。

『だからどうした』

『近づくな』

『気色悪い』

そう言っただけ拒絶、というよりも相手にしていないのだ。声をかける、ということも滅多にしないのだ。

「都。悪いことは言わないから、あんた、甲斐天瀬はやめときなさい」

「なんで？」

「『なんで？』?! あんた、人間扱いされてないのよ!?! せめて人間扱いされる人間を選びなさい!」

「……………? 甲斐君、人間扱いしてくれるよ?」

「嘘つきなさい!」

「本当だよ。だって私のこと『イインチヨ』て呼ぶもん」

『イインチヨ』って人間でしょ? と首を傾げながら問い掛けた都に、友人である小藪は絶句する。

「それは人間じゃなくて、役職よ!」

「でも、人でしょ?」

「単純に委員長ぐらいいは付き合っておかないと学校生活に支障があると思っただんでしょ」

完全にあんたじゃなくて、委員長っていうのを見てないじゃない、と言った小藪に都は笑う。

「違うよ。だって、甲斐君は別に委員長と付き合うことに必要性を感じてないもん。だから特別なんだよ」

ふふ、と笑う都の言葉に小藪は絶句する。

てつきり都は他の女子高生と同じようにただ甲斐天瀬を容姿を見て騒いでいるとばかり思っていた。が、都は違う。甲斐天瀬がどういう人間なのか理解しようとしている。

「…あんた、意外と人間見てんのね」

「?」

何が? と首を傾げる都に小藪は苦笑いを返す。

恋する少女。

彼女を嘗めることなかれ。

都は委員長。

本当は成績順でなるはずだったのだがトップの甲斐天瀬が拒否した為、一番ずつずれて都がクラス委員となった。

「ねえ、都。一つ聞いてもいい？」

「ん？」

「甲斐天瀬の、どこがいいの？」

「どこ？ んーとりあえず、容姿」

容姿端麗。

紅い髪、紅い目ではあるが、甲斐天瀬は万人が認める美形だ。

す、と通った鼻筋やモデル顔負けのスタイルのよさは百メートル離れていても美形とわかる。

故に入試式の際、壇上からかなり離れてはいたものの、都は甲斐天瀬に一目惚れしたのだ。

「けど、あんた…あの性格よ？」

「いいじゃない。クールで」

「あれはクールじゃなくて冷酷っていうのよ…」

靡いてくる人間を容赦なく蹴倒し、媚びてくる人間を容赦なく張り出す。

そんな空気をまとっている甲斐天瀬をクルルの一言で表せないだろうと都に言えば、都はケラケラと笑った。

「でも、甲斐君優しいよ。きっと」

「誰に？」

「んー、家族、とか？」

「知らないのに言うのはやめなさい」

一瞬信じかけるから、と諷める小藪に都は笑う。都にとって別に甲斐天瀬が人を寄せ付けない、孤高の空気をまとっていても問題ない。何故ならば都はクラス委員だから。

必要があれば甲斐天瀬に話し掛けるし、それにあわせて甲斐天瀬も必要があれば返してくる。

だから、多分。世間話、とまではいかないが甲斐天瀬に罵声ではない言葉をかけられたのは、校内広しといえど都くらいではなかろうか、と自負している。

ちなみに甲斐天瀬は教師に対しても拒絶し、話し掛けようものならば相手が体罰を禁止されていることをいいことに、容赦なく暴力…というよりも脅迫を行うのだ。

「下手なヤクザよりもヤクザみたい…」

「えー？」

小藪の言葉に反論という意味で声を上げる都。その都の反応にあんたも好きねえ、とため息交じりに返したその時だった。

小藪が止まる。

そう、言葉通り、ぴし、という擬音のように固まったのだ。

「小藪…？」

おかしい反応に都が怪訝そうに声をかければ、不意に後ろから声をかけられた。

「イインチョ」

と。

「ありゃ、甲斐君。どしたの？」

都の後ろに立っていたのは今まで話題に上がっていたうえに、かなりけなしもしていた甲斐天瀬本人で。

そんな気まずいを通り越して死刑宣告を受けたように顔色が真っ青になった小藪とは対称的に都は笑いながら甲斐天瀬に話しかけた。

「ノート」

「ああ、化学の？　ありがとう」

す、と差し出されたノートを受け取れば、甲斐天瀬は深いため息をついて。

「甲斐君、ため息つくとき幸せ逃げてくよ？」

ため息をついた甲斐天瀬に都が真剣に言えば再び甲斐天瀬はため息をつき。
そして。

「……………」

ジロリと小藪を一睨みし、そして背中を向けた。

「カツコイー」

「あんだ…」

立ち去る甲斐天瀬を都はうつとりと見つめる。そんな都に小藪はようやく声を発したがその声は恐怖からか掠れていて。

「どしたの、小藪。声掠れてるよ？」

「あの眼光に睨み付けられてけりりとしてるあんだのほうが異常よっ」

私はいたって普通だ、と喚く小藪だが都はそんな小藪にまるでどめを刺すように言った。

「なら悪口言わなきゃいいじゃん」

「…あんだね…」

本人がやってくるとは露ほど思っていなかったのだから仕方ないだろうと小藪は反論しようと思ったが、やめた。都はクラス委員だ。しかも唯一甲斐天瀬が役職名とはいえ『イインチョ』と呼ぶ人間だ。その都のところに甲斐天瀬が絶対に来ない、という保証などどこにもない。

「…あんたはすごい」
「？」

何が、と問えど小藪からは詳細は返って来ない。
諦め、都はふと先程受け取ったノートを見てあることに気付いた。

ノートの表紙にはもちろん甲斐天瀬の名前が書かれているのは当たり前なのだが、その名前の近くに何か書いて消した跡がある。
何だろうとじっと見つめてうつすらと見出したのは二文字。

『
テン
』

誰かが書いて誰かが消した跡なのだろうが、その文字の意味することは都にはわからなかった。

中間考査。

それが行われた六月頭。その結果が張り出された六月中旬。

誰もがその張り出された順位と名前を見て驚きを隠せなかった。

一位 甲斐 天瀬 四九八点

二位 天辻 都 四九五点

一位、二位の差、わずか三点。

そして五百点満点の四九八点と四九五点。

一体どんなハイレベルな首位獲得争いなんだ、と思うと同時に今後この二人が首位争いをするのだろうかと思もたてる。

しかし何よりも。

「ほんつとに、甲斐天瀬って頭よかったのね…」

「授業は寝てるけどね」

「なのにノート提出とかはきっちりできてるし、…睡眠学習？」

ヒソヒソと話される甲斐天瀬の授業態度。それはかなり教師から見れば劣悪なもので。

起きていることはなく終始寝ている。移動教室も移動するが眠って

いるし、体育や選択の芸術授業も形だけ参加している、という程度の態度。

なのに、高得点を甲斐天瀬は叩き出した。

「厭味にしか見えないわね」

「そう？」

「都。あんた、悔しくないの？」

二位である都に小藪が眉をひそめて問う。その問いに都はキョトンとした顔をして。

「悔しい？ 何で？」

「だって、あんな不真面目に授業参加してる人間に負けたのよ？」

「んー。甲斐君でさ、確かに授業態度は悪いかもしれないけど、授業をサボるってこと、ないじゃない？ 確かに終始眠ってるかもしれないけど、けどいないってことはないじゃない？ 甲斐君が授業サボってるのにあの点数ならへこむけど、そうじゃないからすごいなあって思うよ」

ほのぼのとした都の返事に小藪はただただ脱力した。

「あんた、少しくらい嫉妬しなさいよ…って、あら…」

「？」

呆れた小藪が何かを見つけ、ふと眉をひそめる。その表情に気付い

て都も小藪が見る先を見ればそこには話題の甲斐天瀬がいて。そして甲斐天瀬は教師数人に囲まれるように歩いている。その表情はかなり険しく、不機嫌そのものだった。

「何されてるんだろう？」

「あ、今度全国模試があるからそれに出てくれとか、そんなのじゃない？」

希望制の全国模試が一ヶ月後にあることを思い出した小藪が言えば、都はそんなのあったっけ？　と言わんばかりに首を傾げていた。

「ほら、全国模試ってさ、上位に入ったらその学校がデカデカと新聞に載ったりするじゃない。それで広告代わりにして入学希望者集めるんじゃない？」

「へー…。いい迷惑だね」

あっさりと正直な感想を口にした都に小藪は「正直過ぎ」と小突かれる。本当のことを言っただけが悪い、と睨み返せば小藪は肩を竦める答えが帰って来た。

「面倒じゃない。これで点数低かったら模試代は損になるし、先生からは責められるし」

わたしだったらやらない、とはっきり明言した都に小藪は笑ったのだが、次の瞬間あ、という顔をして。

「？」

何？　　と思ひ小藪が見る後ろを振り返ればそこには担任がいて。

「…先生？」

どうして後ろにいたのかを問えば担任は苦笑いを浮かべながら言った。

「天辻、お前にも模試の」

「嫌です」

すべて言うより先に都はスパンと断つように担任に言った。その都に横にいた小藪がハラハラと不安そうな顔をしたが、都は担任に面と向かって言った。

「今度の全国模試は希望制のはずです。それを学校が参加を促すというのほそもその希望制という意味を果たしていないんじゃないですか」

「天辻、あんな」

「別に勉強が出来るからとかクラス委員でも、学校の言いなりでもないし、先生方の玩具でもありません」

意志を持った人間です。

そうはつきりと周囲に聞こえるように都が言えばヒソヒソと囁きが始まる。

「ねえ、先生、生徒のこと何だと思ってるの？」

「全国模試で高い点数出してもらいたいからって普通強制させる？」「サイテー」

完全に教師に対して非難の目が集中すればこれ以上担任も強いということも出来ないし、強く言えば周囲の反感を買うことは目に見えている。

どうすることも出来ず立ち尽くした担任を放置して立ち去ろうとした都の耳に、ガシャンという何かが割れた破壊音が届いた。続いて男女の悲鳴や驚きの声が届く。

何？ とその音のしたほうを見れば、そこには割れた窓ガラスと。

「…甲斐君？」

腕から血を流した甲斐天瀬が騒ぐ教師を素通りしてこちらにやってくるのが見えた。

「先生」

「お、あ！？」

「怪我したんで、早退します」

事務的にそう担任に言って甲斐天瀬は昇降口へと向かい、そのまま靴を履き変えたと行ってしまう。

その後には点々と血の跡が残る。

「え、え？ 甲斐君、カバン忘れた？」

「そういう問題じゃないでしょ」

相も変わらずズレたことを言った都に小藪がツツコミを入れた。

甲斐天瀬が早退したその放課後。

彼の席に残ったカバンを見つめて都は呟く。

「持って行ったほうがいいよね？」

「そうだけど…、あんた家知ってる？」

「知らない」

「じゃあ渡せないじゃない」

何言ってるのよ、と呆れた口調で小藪に言われ都はけど、と言葉を重ねる。

その時だった。

「すみません」

「？」

黒のキャスケットを目深に被りノンフレームのサングラスをかけた
同い年くらいの少年が教室の入口に立っていて。

誰だろう、と首を傾げつつも声をかけられた都は「はい」と応じる。

黒のスカジャンに黒のジーンズ。明らかに見た目はチンピラか不良
にしか見えなくもないのだが、纏う空気はそれこそ屈託のない子供
のようなもので。

見た目に騙されているのか、それとも醸し出す空気に騙されている
のか、そんなことを考えながら少年を見れば、表情まではサングラ
スで伺えないものの、ニツコリと笑って見せた。

「すみません。甲斐天瀬の席ってどこですか？」

「甲斐君、ですか？」

「はい。今日早退したのにカバン忘れていったと思うんですよ」

「あ、はい」

甲斐天瀬の席を問う理由を何となく察し、彼は甲斐天瀬の家族、と推測して都は甲斐天瀬の席を教える。

「窓際の一番後ろの席です。えっと…」

「はい？ あ、俺ですか？ 俺は甲斐天瀬の家族ですよ」

ニツコリ。

また、屈託なく笑う。

その笑顔は本物だと思っただが、あの甲斐天瀬からは想像つかないような笑顔の振り撒きぶりに都も戸惑いを隠せない。

そんな都を察したように少年は笑った。

「似てないです？ 甲斐天瀬と」

「あ、いや…」

露骨に見すぎた、というか不審がってしまっただろうか、と己の態度に反省すれば少年は笑って。

「気にしないでください。本人含めてわかってますから」

「そ、ですか。あ、甲斐君、手？ 腕？ 怪我、大丈夫でしたか？」

「ええ。縫いましたけど生きてますよ」

さらりと酷いことを言ってくる少年にパチパチと瞬きし、それからそっと問い掛ける。

「…えと…何針くらい…？」

「十八針。今日の夜にでもきつと熱出るだろうから、今は家で大人しくしてますよ」

二、三日休みますね、と笑いながら話す少年は明らかに家族である甲斐天瀬を心配しているような感じがしない。寧ろ他人事のように、どこか世間話のような扱いをしている。

確かに他人事ではあるのだが、本当の他人である都から見ても酷いのでは？ と首を傾げたくなるほど少年は甲斐天瀬を心配していない。

「あの…」

「はい？」

「…甲斐君のこと、心配じゃないんでしょうか…？」

思ったことはそのまま口にしてしまうという損な性分の都。その都の言葉に少年は一瞬目を丸くして。それからすぐに穏やかな笑みを浮かべて返した。

「心配してくれてありがとうございます。俺が心配していないのはしよっちゅう怪我してくるものですから、もう慣れちゃって」

「怪我って、甲斐君が…？」

「ええ。流石に今回のようにおおっぴらではないんですが」

大体不良に絡まれて帰って来ているので、と笑って説明する少年の言葉に都も確かにそんな日常ならば心配しなくなるのは仕方がない

か、と思ってしまう。

「えと…ノートとか、休んでる間の分、どうしましょう?。」

汚い字でよければコピーしますが、と都が問えば少年は一瞬キョトンとして。

「ノート…あの人取ってます? 普段」

「いいえ。寝てます」

即答した都に少年は目を丸くし、そしてすぐにクスクスと笑って。

「ならいらぬですよ。プリントの類は机に突っ込んでいたらいいと思うんで、休み明けまでほっといてください」

「はあ…」

それでいいんだ、と思いつつもまるで本人が言ったかのような台詞だな、と少年の言葉を聞きながら感じる。その都の思考を読み取ったように少年は都に言った。

「不思議です? 本人じゃないのにすぐに決めるの」

「や…。即決でいいんじゃないですか?」

相も変わらずズレた台詞を口にする都に、けれど少年は可笑しそうに笑っていて。

「お姉さん、いい性格してますね」

「いや…友人からはズレてるって言われています」

「いいじゃないですか。その人の個性で」

ニツコリ笑う少年に馬鹿にされたような気がしなくもないのだが、少年は馬鹿にする、というよりはむしろ誉めているように感じて

「…一つ、伺ってもいいですか？」

「はい？」

何ですか？ と首を傾げた少年に都は思い切って、唐突に問う。

「甲斐君って、好きな人いますか？」

「………はあ？」

都のその問いに少年は素っ頓狂な声を上げる。その反応にやっぱり唐突過ぎたか、と反省すれば少年はしばし考えてから都に返した。

「それは恋愛？ それとも友愛とか？」

「えっと、両方聞きたいですがそれだと二つになるので、恋愛で」

律義に最初の断りを守る都に少年はクスクスと笑いながらけれどしつかりと答えた。

「恋愛での好きな人はいないですよ。友愛というか、家族愛はありますけど」

「家族…」

じゃあ甲斐君は貴方のこと好きなんだ、と率直に問えば少年は全く迷いなく答える。

「ええ。愛されてますよ」

「貴方も甲斐君が好き？」

「もちろん。愛しちゃってますよ」

大好きです、とニツコリと笑った少年のその表情は今まで見せていた表情のどれとも異なり、無防備な素の表情で。

それをさらけ出してしまうほど、彼らの家族愛は強いのかと痛感した。

「いいこと聞きました。ありがとうございます」

「いいえ。お姉さんは甲斐天瀬を好きなんですか？」

「好きですよ」

問われ、都は素直に返す。その都の言葉に少年は「そうですか」と淡く微笑んで。

けれど。

「落ちませんよ。あの人は」

「そう…何ですか？」

「ええ。そもそも…他人に興味を持ちませんからね」

難しい恋愛かもしれませんが、と声をかける少年の言葉を聞いて都は気付く。

彼は「頑張つて」と言っていない。

まるで応援しても無駄だと言っているように。

「…家族から見ても、難しい恋愛ですか？」

甲斐君との恋愛。

そう問う都に少年は困ったように笑う。それは何も言わずとも肯定
していて。

「あの人は、他人を拒絶する。それは、特別はないよ」

だから頑張るなら頑張ればいい。

だけど。

「叶わないよ。それだけ、言っときますね」

ニッコリ笑いながらも、残酷な言葉を少年は吐き出すとじゃあ、と
言って教室を後にする。

その後ろ姿を都はただ呆然としながら見つめていた。

街で出会ったその子は、雨が止むのをじっと待ち。

そして、まるで誰にも気付かれないように息を殺しているかのように見えた。

学校で会った少年が言った通り甲斐天瀬はその週の残りの日をすべて休んだ。本当は別に学校に来て支障はないらしいのだが、単純に本人が行きたくないと言ったのか、学校には欠席の連絡が届いただけだった。

そして週末。

一人で夕飯の買い物がてら街をウロウロしていた都は急の雨に降られ、慌てて店の軒先に入った。

雨が止むのを待とうと決めた時、都のいた軒先に誰かが雨から逃れるため同じように駆け込んで来た。

何気なくその人物を見て、都は目を丸くした。

美少女だった。

日の光を知らないかのような真っ白い肌。澄んだ黒の瞳。化粧などしなくても色付いた血色のいい唇と頬を見て、物語の白雪姫とはこんな感じだろうと納得してしまうほど。

そんなことを考えていた都の視線に気付いたのか少女はふと都を見る。が、都が何かを返す前に少女は視線を元に戻し、ただひたすら

雨が止むのを待っていた。

「こんにちは」

思い切って話し掛けてみると少女は一瞬都を見て、また外の雨を見る。それからしばらくしてからはつと都を見つめ返して来た。

「わ、たし？」

「うん。あ、よかった。気付いてくれた？」

無視されちゃったのかと思った、とおどける都に少女は「ごめんなさい、と表情を曇らせて答えた。

「ごめんなさい、その…私に話し掛けてるなんて思わなくて…」

「ううんいいよ。私も急に話しかけちゃったから、びっくりさせちゃったかな？」

こっちこそごめんね、と謝れば少女は首を横に振ってそんなことないです、と言いつつ切った。

「急に雨に振られちゃったでしょ？ 寒くない？」

「あ、平気です」

にこ、とはにかんだように笑った少女に都もつられるように（笑）返して。それからバッグの中にキラメルがあつたことを思い出して中から取り出すと、一つを少女に手渡した。

「はい」

「え…」

「あ、毒は入ってないよ!」

「いえ…、えと、ありがとうございます」

渡されたキャラメルにドギマギしながら少女はぎこちない手つきで口の中に放る。それを見てから都もキャラメルを放り込んで。

「お、いしいです」

「よかった」

まだあるから遠慮しないで言ってね、と言えば少女は一瞬キョトンとして。

「え?」

「ん? もう一個いる?」

「い、いえっ」

まだ食べてます、と首を横に振って答える少女に都は可愛いなあと思いながら笑みを浮かべた。

「一人で今日はお買い物?」

「いえ、兄と一緒にだったんですが…」

「…もしかして、はぐれちゃった?」

「あ、大丈夫です。さっき携帯で連絡したので」

待っていようと思った矢先に雨に降られ、ここまで走って来たのだと話す少女に都はそっかあ、と返す。

「けど約束したところと違う場所じゃ、お兄ちゃんわかるかな?」

「GPS機能で、わかるから雨に当たらないところで待ってるって」
「あ、なるほど」

最近の携帯は進んでるなあ、と都は思い領けば、少女は視線を都から外側へと向ける。

早く迎えが来ないか待っている。

そんな風に感じられた。

そして。

「ウミお兄ちゃん！」

少女が不意にぱつと表情を明るくさせて笑う。その視線の先を見て都は目を丸くした。

甲斐天瀬だ。否、甲斐天瀬が黒髪黒目になって、雨の中を走っている。

しかし、少女は甲斐天瀬を『ウミ』と呼んだ。

もしかして人違いだろうかと驚きながら二人を見つめていれば、二人は都など気にせず話す。

「重音、悪い。遅くなった」
「そんなに待ってないよ？」

「けど、不安だったろ？ ほら、こんなに冷えてる」

そう言っただけ少女に自分が着ていたシャツを羽織らせる。

寒くない、と言っていた少女だったが着せられたシャツを返さない
ということとは、我慢して寒さに耐えていたということか。

今更ながらに少女が遠慮をしていたのだと痛感していれば、少女は
おもむろに都を指差して言った。

「あのね、このお姉さんがキャラメルくれたの」

「キャラメル？」

「え？」

唐突に会話に参加させられあたふたした都に『ウミ』は一瞬首を傾
げ、それから少女に問う。

「お礼は言った？」

「うん」

「なら、よし。すみません。ご馳走になったみたいで」

「あ、いいえ。気にしないで下さい」

礼を述べる『ウミ』に都は慌てて首を振る。

そしてこの一連の流れを見て確信した。

彼は甲斐天瀬ではない。確かにそっくりだけれど、彼は甲斐天瀬で
はない。

では誰だろう、と思い、都はそのまま問いかけていた。

「あの、失礼でかつ唐突何ですが」

「はい？」

「…甲斐天瀬って、ご存知ですか…？」

「甲斐天瀬？」

恐る恐る口にした甲斐天瀬の名前に『ウミ』はキョトンとして。それから首を傾げて言った。

「それは兄ですけど…なんで、名前…」

「兄！？」

「はあ」

「えっと…同級生、何ですよ」

なので名前を知っています、と素直に告げれば『ウミ』はへー、と言って。

「えっと…双子、さん？」

「え？ ああ、似たようなもんです」

「？」

双子に似ているも何もないだろうと思うのだが、本人がそういうのならそうなのだろう。

そう無理に納得して都は「そうなんですか」と返す。その都の言葉に少女が不思議そうな顔で都を見つめて言った。

「お姉さんはテンお兄ちゃんのお友達？」

「『テンお兄ちゃん』？」

誰？ と首を傾げた都に『ウミ』がフォローを入れる。

「甲斐天瀬のことですよ。あだ名が『テン』。家族全員そう呼んでいます」

「そうなんだ。えっと、テンお兄ちゃんとは私はただのクラスメイトだから、お友達じゃないかな」

「お友達じゃないけど、知ってるの？」

「私クラス委員っていつて、クラスの代表なの。だからクラスメイトみんなと話したりすることがあるから」

だから話したり、知っているけれどそれは友達とは少し違うかな。

そう説明した都に少女はそっか、と頷いて。

「へえ？ あんたがクラス委員なんですか」

「え？ うん」

「よく言っていましたよ。テン兄…甲斐天瀬を唯一怖がってない女、て」

「…甲斐君が？」

「ええ」

そんなことを言っていましたよ、と『ウミ』に言われて都は混乱するばかりだ。

甲斐天瀬が家族に学校のことを話しているとは思わなかった。けれど実際話しているから『ウミ』は都の存在を知っているのだ。

「それは、…えと、褒められてるの？」

「どちらかといえば、珍しがってる、ですかね」

気にしなくてもいいと思いますよ、と締める『ウミ』に都は納得してもいいものかと悩む。

が、気にするなと言われたのだから気にしないことにしようと結論づけた。

「じゃあ、俺達はこれで」

「あ、はい」

少女とすっかり手を繋いで帰ることを言った『ウミ』。その二人にさよなら、と手を振れば少女はぎこちない動きと表情で手を振り返す。

その仕草に可愛いなあと思い満面の笑みを浮かべて笑いかけて。

過ぎ去る二人を見つめてふと、思う。

「あれ、もしかしくなくても、あの子、甲斐君の妹さん…？」

似ている似ていないはともかく、仲良く手を繋いで街中を歩くというのは多感な男子高校生が何の躊躇もなくする、ということは『ウミ』が少女を溺愛というか可愛がっているのは目に見えている。

ということは甲斐天瀬も同様に可愛がっているということだろうか。

「あー…けど笑ってたしなあ…」

甲斐天瀬ではないけれど、甲斐天瀬そっくりな『ウミ』。彼が笑う姿はきつと甲斐天瀬が笑う姿とそっくりなんだろうと思い、双子なのだからそれもそっかと思いい直して。

「…妹さんの名前、何だろう？」

確か『ウミ』が口にしていたきがするけれど。

けれど？

「ま、いいや」

可愛い子にあった。

今日の収穫はそれ。そう自分に言い聞かせて、
都はいつの間にか止んだ雨上がりの街を再び歩き出した。

それはとても晴れた放課後。

テストも終わり、夏の気配がすぐそこに感じられるその日。

帰ろうとした都の目に入ってきたのは人だかり、というよりも好奇の目。何かあるのかと思い都もそちらへと視線を向ければ、何故か少女がいた。

白のレースをふんだんに使ったフワフワのワンピースに、白の帽子にはオレンジのコサージュでアクセントをつけている。
それを身に纏う少女の顔を見て、都は目を丸くした。

「あなた、確か…」

「…？」

都が声をかければ少女はずっと伏せていた顔を上げる。それからぼんやりとした表情で呟いた。

「お姉ちゃん…」

「あ、やっぱり。どうしたの？ お兄さんは？」

「えと、今、迎えに来てもらってます」

一番目立つのがこの学校だったから、と話す少女に都はそっか、と頷いて。

「うん、ちょっと待ってもらえる？ 甲斐君——あーと、テンお兄さん、連れてくるから」

「…テンお兄ちゃん？」

どうしてここにいるんですか？　と言わんばかりの少女の反応に都はキョトンとして。

「どうしてって、ここがお兄さんが通ってる学校…よ？」

だからいるんだけど？　と問う都に少女はやはりキョトンとして。

「そう、何ですか」

「うん。だからもうちょっと待っててくれる？」

「はい」

頷いた少女を確認して、都は今自分が出てきた教室へと走って戻った。

「甲斐君！」

教室にまだ残っていると思っていた甲斐天瀬は担任に呼ばれて職員室に行った、と教えてもらい、都はひたすら走った。ようやく目の前の甲斐天瀬を見つけたのだが、その時にはもう息は上がり、甲斐天瀬を呼び止めても用件をすぐに言うことが出来なかった。

「…何？」

不機嫌そうな眉をひそめる甲斐天瀬。その甲斐天瀬が本当に不機嫌になっていなくなる前に言わねば、と思い都は口を開いた。

「妹さん」

「は？」

「妹さん、校門のところにいるの。淋しそうだったから、行ってあげて」

「妹…？」

何でお前が知っているんだ、という顔の甲斐天瀬に都は「街で会った」と告げる。

「…何で妹って言い切れる？」

「えーっと、『ウミ』、さん。が、妹って」

「ウミ？ あいつに会ったのか？」

「偶然街で」

その時妹さんにも会いました。

正確には妹に会った後で『ウミ』に会ったのだが、そんなことを説明しているよりも先に、都としては甲斐天瀬に妹を迎えに行ってもらいたい。

ただ、それだけだ。

「……」

しばし沈黙して、甲斐天瀬は歩き出す。それを追いかけてみれば、彼は昇降口にいたり、校門へと向かう。

そして。

「——重音」

「テンお兄ちゃん！」

甲斐天瀬が少女に声をかけた瞬間、少女の表情はまるで花が咲いたようにぱつ、と明るくなる。

それぐらい彼女は心細かったのだと、そう痛感した。

「…誰かと一緒じゃないのか？」

「今、ソラお兄ちゃんが来るの」

「ソラが？」

「うん」

甲斐天瀬に抱き着き話す少女。その少女の言葉に甲斐天瀬は眉をひそめて。

「何で一人でここにいるんだ？」

「…」

「重音？」

「あの、ね。葵伊さんと一緒に病院行つたの。葵伊さんと本当は一緒に帰る予定だったんだけど、急患入つたの。一人で帰ろうとしたら、人…」

「ん、そか」

最後まで少女は言っていない。けれどももう十分、と言うように甲斐天瀬は少女を抱きしめる。

その光景を見て、誰もが言葉を失った。

人嫌い。人を近寄らせない。そのあの甲斐天瀬が少女を抱きしめ、穏やかに笑っている。

それだけで奇跡と言いたい光景なのだが、少女の顔を見る限りそれは少女にとっては普通のことらしい。

そもそも学校で見る甲斐天瀬と家での甲斐天瀬、それは全く違うものかもしれない。

そう考えていた都の肩にポン、と何かが置かれた。

え、と振り返ればそこには少年。

黒のニット帽と黒シャツ、そしてジーンズを纏い、サングラスをかけた少年がいて。

どこかで見たような気がするのだが、どこで見たのか思い出せない。そんな都の思考を読み取ったかのように、少年は笑った。

「委員長さん、忘れた？」

ニヤリ、とも、クスリ、とも言い表せない笑いを零して少年は都から離れて。

そして。

「重音。お待ちせー」

「ソラお兄ちゃん！」

「ソラ」

「テン兄は学校お疲れ様。バイクで来たけど、サイドカー付けて正解だったな」

一緒帰ろう、と笑う少年——ソラ。

その後ろ姿を見て都はあ、と気付いた。

「あー！ あの時の甲斐君のご家族！」

「…ソラ、お前どうやって知り合っただ？」

「え？ 普通？」

都の言葉に甲斐天瀬は呆れた顔をし、その甲斐天瀬の言葉にソラはキョトンとしている。

「え…と、一つお伺いしたいんですが」

「はい？」

「甲斐君との関係は…？」

「兄弟」

ニツコリと笑ったソラに都はただ絶句していた。

兄弟、と言ってそのまま帰ってしまった甲斐兄妹。

その颯爽と帰る様はまるで映画やドラマのワンシーンを見ている気分になったが、何にしろ、放っていかれた、という事実。

「まあ、いいか」

甲斐君の珍しい表情が見れたことだし、と前向きに考えて。

ついでに甲斐天瀬の家族構成も何となく知ることができたのだからよししよう。

そんなことを考えた都の目にふと留まったのは小さな袋。

何だろうと拾いあげると、それは病院などで貰う薬袋。そしてそこには【北條重音】という名前が。

「…重音ちゃんのことだね？」

では、何故名字が『北條』なのか。

兄、と慕い、妹、と可愛がっているのに名字が別姓。

「…離婚？」

そしてそれぞれバラバラに引き取られた？ と推測するが、よくよく考えてみれば三人仲良く帰ったのだ。明らかに一緒に暮らしているとしたか考えられない。

「…まあ」

とりあえず、落とし物を届けてあげればいいか、と思うのだが残念ながら都は甲斐天瀬の家を知らない。

拾った袋を見てもそこには住所も書いていないし、電話番号も書いていない。

しかし薬ならばすぐに必要だろう、と思いどうにか連絡が取れないものかと考えるが、いい案は浮かばない。

「明日…でもいいのかなあ…？」

とりあえず病院に電話をして、拾った、と言えば何かしらしてくれるだろうと思い、都は歩きながら電話をかけた。

病院に連絡したところ、担当医であり家族でもあるという人が電話に出た。

『重音が薬を？』

「はい。えっと、届けたほうがいいですよ、ね？」

『いや、まだ家に薬はあるから。明日、テン——天瀬に渡してもらえるかな？ 天瀬に言っておくから』

「あ、はい」

担当医の声は大変柔和。そして穏やかな口調で、けれどしっかりしてていて。

大人の男、という雰囲気電話越しで伝わるということは随分男前

な人なんだろうな、と勝手に考えた。

「じゃあ、明日、甲斐君に渡します」

『うん。よろしく』

そう言っただけで電話を切った。

後は家に帰るだけ、と思った都にどこかで見たことのある後ろ姿を見つけて。

「――、ウミ、くん」

「？」

戸惑いつつも口に出した名前は変なところで切れて。けれどその都の声が届いたのか目当ての人間は立ち止まり振り返った。

「…あんだ…」

この間会った人、と完全に他人という認識の少年――【ウミ】の反応に都はもう少しフレンドリーになろうよ、と内心嘆きながら【ウミ】に近づいた。

「偶然！　というか、会えたなら電話しなきゃよかったっ」

「は？」

「いや、これを拾いまして…」

突然叫んだ都に明らかに不快と怪訝の入り交じった目を向ける【ウミ】に都は素直に先程拾った薬袋を渡す。
その薬袋を見て【ウミ】はキョトンとした。

「…何で持つてるんだ？」

「重音ちゃんの落とし物で…」

「重音が？」

明らかに「だから何でその落とし物を拾えるようなところに重音がいるんだよ」と不快を通り越した威圧に都はたじたじになりながら答えた。

「重音ちゃんがうちの学校前まで来まして。それで、学校にいた甲斐君と重音ちゃんを迎えに来たソラさんの三人で帰った後で、その薬袋が落ちてるのに気付きましたっ」

「…ふーん」

「で、すぐに本人に渡したほうがいいと思って病院に電話したら担当医さんが出て、明日甲斐君に渡してくれたらいいって言われたんだけど、今、ウミ君を見つけたから、ウミ君に持って行ってもらえばいいかなと思いましたっ」

「…何で敬語？」

「えっと、何なとなくウミ君が機嫌悪そうに見えて」

思わずその威圧に負けて敬語になりました、と都が正直に言えば【ウミ】は明らかに呆れた顔をして。

「あんだ、馬鹿正直だな」

「よく言われます。で、お願いしていいですか？」

重音ちゃんに持って行ってもらうの、と【ウミ】に問えば【ウミ】はわかった、と頷いて。

「担当医……てことは葵伊さんか。そっちには言っておくから、あんな帰れば？」

「そうさせて頂きます」

明日甲斐君に話すきっかけが無くなったことは大変惜しいが、重音ちゃんに確実に、そして一日早く戻ってもらうほうがいい、と一人納得して都は【ウミ】に笑って。

「お願いします、じゃないな。えっと、お返しします」

「俺のものじゃないけどな」

まあ頼まれました、と言って【ウミ】はクルリと背中を向ける。そして歩き出したのを見ると彼の家は歩いている方向にあるらしい。

「お願いします」

やっぱりこの言葉が一番合うかも、と思い直して都は遠ざかっていく後ろ姿に声をかけた。

次の日、登校した都に話しかけて来たのは他でもない、甲斐天瀬だった。

「イインチョ」

「あ、甲斐君。おはよう」

「はよ。昨日はどうも」

「え？ あ、重音ちゃんの…」

薬？ と問いかけた都に甲斐天瀬はああ、と頷いて。

「和行さんや早祈姉も礼言ってくれって」

「和行さん…？ 早祈姉…？」

甲斐天瀬の口から出て来た人の名にキョトンとすれば甲斐天瀬は一瞬あ、という顔をして言い直す。

「重音の父親と母親」

「…？ 甲斐君のご両親じゃないの？」

「違う。俺達からしたら養い親だ」

あの二人は、と話す甲斐天瀬に都はえ？ という顔を返す。しかし甲斐天瀬はそれ以上説明してくれず、そのままじゃあ、と言って去ってしまう。

せっかく甲斐天瀬の家族構成が聞けたのに、と残念がる都だが、ふと昨日の薬袋に書かれた名前を思い出す。

北條重音。

重音の両親、ということは和行という父親も早祈という母親も共々姓は北條だろう。

では、甲斐天瀬は？

【ウミ】やソラの面々も兄弟だから姓は甲斐だろう。しかしそれでは重音や和行、早祈とは血縁関係というか、戸籍上他人ということになる。

先ほど和行と早祈は養い親だと言っていたので、籍は甲斐で、けれど普段の生活は北條と一緒に生活しているということか。

「ややこしい…」

考えるのは今は止めよう、と思い直して都は一時間目の授業の準備を始めた。

「ねえ、都。あんた、どうしたの？」

「え？ 何が？」

授業も終わり、いわゆる放課後になったと同時に小藪に心配され都は思わずキョトンとする。

特に体調が悪いわけでもないし、気分が悪いわけでもない。ストレスも溜まっていけないのに、何か他人の目から見てもおかしいことがあったのだろうかと首を傾げれば小藪が答えた。

「朝から甲斐天瀬と話してたじゃない」

「ああ、うん」

でもあれは甲斐君が伝言を頼まれたただだよ。

そう返すのだが、小藪は聞かず信じられない、という顔をした。

「甲斐天瀬と朝から話さなきゃいけないことなんかあるの!？」

「え? ……さあ……」

「あんた、朝何話したのよ」

ないなら話したことがおかしくなるじゃない、と言う小藪に都はそれもそうだ、と妙に納得して言った。

「甲斐君の妹さんの忘れ物…落とし物を偶然拾ってね。それで偶然会った甲斐君の弟さんに持って行ってもらったの」

「…甲斐天瀬関係ないじゃん」

「甲斐君は親御さんの拾ったお礼を言いに来てくれたんだよ」

だから関係あるよ、と返せば小藪はわかんないなあ、とため息混じりに答える。

かの人嫌いの甲斐天瀬が自分から他人に話しかけるのはまずない。せいぜい都に話し掛けたとしても提出物の受け渡しといった事務的なことばかり。なのに今日はそういったものではなく、話をした。

それだけ、と誰も思わないのが甲斐天瀬の他人に対して無関心であることが周知という現れでもあるのだが。

「にしても、よく甲斐天瀬の弟と仲良くなったわね」

「…仲、いいのかな？ あれ」
「知らないわよ」

そもそも甲斐天瀬に兄弟がいること自体初耳なんだから、と言う小藪にそれもそうか、と都は納得した。

「甲斐天瀬の弟って、甲斐天瀬みたいなやつなの？」

「甲斐君みたいっていうと…？」

「人間嫌いとか」

「そついうのは、多分ないと思う」

小藪が問うてきたのは内面のこと。これが外見のことだったら都は迷う事なく「色違い」と答えるだろう。

甲斐天瀬は紅。

【ウミ】は黒。

先日会ったソラは金、といった感じだろうか。

紅髪紅目。それと対称的な【ウミ】の黒髪黒目は同じ顔のはずなのに全く違うもの、と痛感するほど。

それにプラスしてまだ顔を見たことがないソラはわかったものでいけば金髪ということ。それぐらいだけれど、三人兄弟でこれほどばらばらの色を揃えた彼等に別の意味で尊敬の気持ちを持つ。

そしてもう一つ。

「バラバラにしなきゃいけなかったのかな…」

「ん？」

「うっん」

ぽつりと呟いた都の言葉に小藪が反応するが、都は首を横に振る。

甲斐天瀬、【ウミ】、ソラ。

この三人がわざわざばらばらの色を持たなければいけない何かがあるのだろうか。

そう、変えなければ困るほど似た何かが。

「…あれ？」

そういえば、と思い出したのは【ウミ】の顔。

【ウミ】は黒髪黒目だったけれど、顔そのものは甲斐天瀬と同じ顔だった。

初めて会ったときは双子だと思ったのだが。

「……ソラくん……」

金髪のソラ。彼の顔はサングラスによって見たことがないがひよつとすると、と仮定を出す。

「…三つ子…？」

そう、三つ子。

もしも三つ子で顔も全く同じならばそれは色を付けて区分けした方が接する人間にとってはわかりやすいかもしれない。

「甲斐君が三つ子…」

だとすれば華やかな兄弟だなあ…と、ズレた感想を持ち。

「三つ子、だから、双子って聞いて似たようなものって答えたのかな？」

初対面のときに【ウミ】は甲斐天瀬と双子なのかと問うたところ「似たようなもの」とだけ返し、明確に「双子」という言葉には頷かなかった。

その理由がもしも三つ子だから双子ではない、というものだったら、【ウミ】の使った似たようなもの、という言葉で納得できる。

できるのだが。

「…あの顔が三つ…」

並んだところを見てみたいなあ、と考えながら都は不思議そうな顔をする小藪に別れを告げて教室を出ていく。

もう放課後なのだから部活もないのに残っている生徒はほとんどいなくて。

いつもの喧騒とは打って変わって静かになった廊下を歩きながら都はまた【ウミ】に偶然でもいいから会えないかなあと考えていた。

すらりと伸びた背。
ぴんと伸びた背筋。

ただ歩いているだけなのに周囲の人間ほとんどが振り返ったり立ち止まったりするのは、一重にこのソラがモデルのような存在感と出で立ちで街を歩いているせいだろう。

その後ろ姿を都は半ば呆然としながら見つめていたのだが、置いていかれてはいけない、と我に返りソラの後ろを追い掛けた。

「ソラ君。えつと…」

「何？ インチョさん」

「…うーん、…またあどでにする」

「何、それ？ 言いたいこと、あつたんじゃないんだ？」

変なの、とソラは言うが都はただ沈黙を返す。

ソラは意地悪だ。

そう今、痛感している。

たまたま、街に買い物に出掛けたのは今日が日曜日だから。

天気もよく、散歩も兼ねた買い物だったのだがその途中に見知った姿を見つけて話し掛けたのが運の尽きだったのだ。

「あ、【ウミ】…じゃない…」

「あ？」

【ウミ】と思った後ろ姿が振り返る。そこには金髪碧眼の【ウミ】や甲斐天瀬と変わらない年の少年が居て。人違い、ならばよかったのだろぅが残念ながら都はこの顔を知っていたのだ。

「…三つ子…？」

「ああ、なんだ。イインチヨさんか」

「……？」

イインチヨ。そう彼は都を指して言った。

つまり彼は都を知っている、ということになる。

「えっ…と…？」

甲斐天瀬ではない。

【ウミ】でもない。

では一体彼は何者だ？ と考え、思い出したのは金髪の少年。

いつも黒の帽子を被っているのでチラリとしか見たことがなかったが髪の色は確か金髪。

碧眼かどうかはいつもサングラスをしているために確認することが出来なかったが、あのサングラスに隠された向こう側の瞳はもしかすると碧眼だったのかもしれない。

そう思い切って口を開いた。

「ソ、ラ、君？」

「こんにちは。どうしたんですか？ イインチョヨさん」

「いや…ただの買い物です」

「へえ？ 奇遇だね。俺も買い物なんだ」

何買うの？ と問われ正直に「あてもなくウィンドーショッピングを楽しんでいました」と返せばソラはくつくつと笑って。

「そんなに警戒しないでよ？ 俺が脅してるみたいじゃん」
「……………」

脅していないかもしれませんが、私は十分怯えているんです。貴方の一挙一動に。

そう都は心の中で呟くがそれを声を大にして言う気にはならない。なんとなく、だが、ソラは一を言ったら十…いや、百くらい返してきそうだと思ったからだ。

そんな都の心の中を見透かしたようにソラはまた、クツクツと笑って言った。

「やだな、百じゃなくて千返すんだよ」

「…どこの壊れたマシンガンですか」

「やだな、スपीカーだよ。そもそもそれなら初めから聞くなっただけだね」

そんなに返されるの嫌ならさ、とソラは言う。そんなソラに都はしみじみと呟いた。

「ソラくんって、ホントに甲斐くんや【ウミ】とは違うんだね」
「…？ なんの話？」

唐突に出てきた兄と弟との比較にソラは首を傾げる。
そんなソラに都はうん、と一人納得して。

「甲斐くんははなっから拒絶でしょ？ 【ウミ】は多少信頼…じゃないな、慣れか何かができると少しだけ心開いて」

「じゃあ、俺は？」

「取っ付き易そうに見えて、本当ははなっからその人と話しをする気がない」

だから一番関わりたくないタイプです、と都が馬鹿正直に告げればソラはクスクスと笑い始めた。

「なるほど、一番関わりたくないタイプか！」

「一個人の考えなんで、深く気にしないでください」

「うん、気にしないけどね」

「……………」

少しは気にしろよ、むしろ傷つくゝとかそんな言葉が返ってくると思っただのに。

そうソラを見つめているとソラは盛大に笑い続け、そして笑いを堪えながら言った。

「うん、やっぱりイインチヨは違うね。だからかな？ 俺達兄弟が興味持ったの」

「…興味？」

「そう。恋愛に発展なんてしないけどね。ただ次は何を言うてくるかな、とか、次はどういう反応するかな、とか、そういうワクワク感が溢れるんだ」

ニツコリと話すソラに都はそうですか、としか返せない。

元々甲斐天瀬に興味を持ってもらったなど考えたこともないのだから。

「…甲斐くんが私に興味を持ったの？」

「俺も『甲斐くん』何だけどね」

「甲斐天瀬くんっ」

わかっているくせに、と睨みつけるがソラはただ笑っているだけだった。

「で、甲斐くんは私に興味を持ったの？」

「持ったと思うよ。ただし、その興味が冷めたかもしれないけどね」

つまりは過去のことかもしれない、とソラは言う。そのソラの言葉に都は一瞬眉をひそめ、それから「意地悪ね」と呟く。

甲斐天瀬にどんなことでも些細なことでもいいから知りたいという都の欲求にソラはただただ苦笑いしか返さない。そのためソラが言ったことは本当なのだろうかという疑惑が浮かんでくる。

「…ねえ、ソラくん…」

「悲愴な声だけど？」

「もう…」

振り回すソラにはあ、とため息をついた都。ため息をついてから、ふとそういえば【ウミ】は呼び捨てだな、と思う。

甲斐天瀬はくん付け。一応同い年だから、とソラもくん付けをしていたが、何となく似合わない気がして来て。

どちらに合わせようか、というか、このソラを見ているとくん、とか呼び捨てではなくて。

「…ソラさん」

「……なんか含みを感じるけど、何？」

「えと…私をからかつてる？」

「いや？ 事実を言ってるだけだけど？」

ただその一言に一喜一憂するのは都次第。だから俺は知らない、とあっさりと話すソラに都は難しいなあ、としかめつつらをする。

「イインチョさんは、素直に感情を露にするんだね」

「へ？」

「そういう人間、うちの家族だと重音以外いないから」

なんか新鮮、と楽しそうに話すソラ。そのソラの表情は歳相応かと問われたら否、と返す。

何か達観した。

そんな言葉が似合う表情だ。

「…ソラくんは、…」
「ん？」

「暗い、目をするんだね。甲斐くんは端から他人を見ていないけど、ソラくんは見てはくれてるけど、暗い」
「……」

ふと思った素直な気持ちを口にすれば、ソラは一瞬目を丸くする。
けれどそれは本当に一瞬で。
それからすぐにいつもの不敵な笑みを浮かべた。

「イインチョ、なら、ウミは？」
「【ウミ】？ 【ウミ】は…そだね、すごい素直」

悪い意味でもなく、馬鹿にしているわけでもない。
そうわかっていからこそ、都の言葉はソラに突き刺さって。

「…だから、興味を持ったんだよ。…だから、近寄りたくもないんだろっけど」

「はい？」
「俺達はひねくれ者ってこと。…いや、俺とテン兄、かな」

ウミは違っ、とソラは言う和不意に歩き出す。

それはあっさり、都を追い越して。

「そ、ソラくん??」
「…じゃね、イインチョ」

遊んでくれてありがとう。

そう笑ってソラは行ってしまう。

その後ろ姿を都はただ何が何だかわからないまま呆然と見送った。

その日、ふらりと現れたその少年に都は絶句した。

黒髪黒目。

純日本人というべきその容姿。

ただそのごく一般的な容姿にも関わらず都が絶句したのはちゃんと理由があつた。

「え……」

「え、何あれ?! 甲斐天瀬、なんで黒髪黒目なわけ?」

クラスメイトの誰もが思つた疑問を何の躊躇いもなく口にしたのは都と一緒にいた小藪で。その小藪の言葉を頭の片隅で聞きながら都は信じられないと呟いていた。

「【ウミ】……」

そう、甲斐天瀬と同じ顔で、けれど黒髪黒目の少年はこの世でただ一人、彼の三つ子の弟【ウミ】だけで。

けれど甲斐天瀬が三つ子と知る人間はこのクラスにはいない。ましてや【ウミ】という名前であることも知らない。

「なんで……。甲斐くんは……?」

確かに【ウミ】も甲斐ではあるけれど、けれど彼は甲斐天瀬ではな

い。

都が大好きな甲斐天瀬ではない。

故にいつもならばおはようの挨拶だの、今日のプレゼントだのと陽気にハートを乱舞させて近寄ることが出来ない。

そんな都の姿に日常を知るクラスメイト達が怪訝そうな眼差しを向ける。

「ちょっと、どうしたの？ 都」

「だって…」

「あ、わかった。別人みたいだから近寄り難いのね」

小藪が適当に見当をつけていう言葉に都は渋々と言ったように頷く。

別人みたいだから、ではなくて、別人だから近寄れないのだ。

このクラスで今そこにいる【甲斐天瀬】が【ウミ】だとわかっているのは他でもない都ただ一人。

多分、あそこにいる【ウミ】も都しか己が甲斐天瀬ではないことを知る者はいないとわかつているはずで。

妙な沈黙が、クラスに漂った。

その日はずっとぎくしゃくした空気が流れ続けた。

教師陣は何度も注意していた甲斐天瀬がまるで更生したかのように黒髪になっているし、授業も大体起きて聞いていた。

それだけで昨日までの甲斐天瀬とは別人だと誰もが口にしたが、都只是はただ、何故【ウミ】がそこにいるのかだけを考えていた。

明日以降も学校に来るのが【ウミ】だとしたら明日以降、プレゼントは別にいらないうち、と考へて。挨拶くらいはしたほうがいいだろうか、と悩んでいると、不意にざわめきが起きた。

え？ と周囲を見れば目の前に立つ、【ウミ】。

「んーと…」

「イインチョ、提出のノート」

「へ？ え、うん…」

一瞬そんなものあっただろうかと思を傾げて見せたが、【ウミ】を見れば「いいから受け取れ」と言っている。

とりあえず受け取ればノートの表紙に小さく、「誰もいないところで中を見ろ」と書かれていて。

その文字は確かに甲斐天瀬の文字に似てはいるけれど違う文字で。

これが【ウミ】の字か、と少しだけ感心してしまう。

とりあえずこの文字の指示通り後で中を見ようと、そう決めて。

「ありがとう」

につこりと笑えば、【ウミ】は一瞬顔をひそめたけれど、そんな【ウミ】の反応に都は小さく笑いを零した。

初めて提出物を貰ったとき、都が礼を言えば甲斐天瀬も訝しげな表情をされた。

こんな些細な反応は兄弟似るものなんだなあと思わず感心してしまった。

もちろん、【ウミ】も甲斐天瀬もそんなこと知るわけもないけれど。

『今日兄貴は休み。』

皆出席、皆勤賞狙ってるらしくて、代理で行けって言われた。』

そうノートには書かれていて。

その文字の前には甲斐天瀬のものであろう普通の板書の文字があった。

皆出席、皆勤賞、という言葉が甲斐天瀬に似合わないのはさることながら、板書しているという事実によつと意外な気持ちになる。授業はほとんど眠っているはずなのにどうやって板書しているのだらうとノートを追えば、板書をしていることはしているがほとんど授業の始まりと終わりの部分しか書かれていない。

しかも一教科の授業ではなくて一日の授業、つまり、一時限目の始まりと六時限目の終わり部分を板書している。

そのため、板書内容がさっぱり繋がらない。

「…寝る前、起きた後…？」

さすがに移動教室の際は起きているがそれ以外はほぼ眠っている甲斐天瀬。

板書は時間があるときと睡魔に襲われていないときなのかと妙な納得をして。

「病欠…なんだろう？」

休みだということはわかったけれど、その原因は何だろう、と考えるけれどノートに書かれているのはただ『休み』。

それだけで。

「…明日以降は、ちゃんと自分来る、よね？」

今日は見なかったことにしてあげる、と心の中で呟いてそれから傍らに置かれた小さな紙袋を見つめる。

「…お見舞い、かな」

そう言って【ウミ】に持って行ってもらおう。

そう都合は決めて【ウミ】の元へと急いで。

よく考えてみれば、甲斐天瀬は一度腕を切って三日休んでいたいるので、皆出席も皆勤賞ももう狙いないのがわかっているのに、狙っているという理由には無理があることにその日は気付かなくて。

そして、まさかこの日以降ずっと、甲斐天瀬が登校してこないとは、予想していなかった。

次の日、学校に現れたのは甲斐天瀬ではなくて、ソラだった。

何故？　と思うがそれよりもソラが金髪碧眼から甲斐天瀬と同じ紅髪に紅眼になっているのが都にとっては気になって。

まるでソラが甲斐天瀬の場所を取って代わったよう。

思わず、その光景を見たくなくて、都は俯き、極力甲斐天瀬を見ないようにした。

「都？」

「…何でもないよ」

クラスメイトの誰もがそこにいるソラを甲斐天瀬と疑わない。それはソラという三つ子の弟の存在を知らないからでもあって。

それでも、都はそこに甲斐天瀬がいないということを認めたくなかった。

「イインチョは、ホントに俺達兄弟を見分けれるんだな」

「ソラくん…」

放課後、人気のない場所でソラに呼び止められ、都は複雑な気持ち

で応じる。

そしてソラの第一声に顔を歪ませる。

「それともあれ？ テン兄以外の男は同じ顔でもテン兄じゃないってこと？」

「…同じ顔だけど、それは三つ子であって、甲斐くんもソラくんもウミも、みんな一人一人、別人でしょ？」

それを一緒、同列というのは失礼ではないか。

そう問えばソラはクツクツと笑って見せた。

その笑い方一つにしても些細な仕種一つとっても、三人三様だ。だから、わかる。

「ソラくんは、甲斐くんじゃないよ」

例えば甲斐天瀬と同じ紅髪に紅眼になろうと、それは甲斐天瀬ではなく紅髪紅眼になったソラだ。

逆に甲斐天瀬がソラと同じ金髪碧眼になっても、それは金髪碧眼の甲斐天瀬だというのと同じで。

それ以外の何物でもない。だから、ただ真っ直ぐにソラを見つめていた。

「ねえ、ソラくん。甲斐くんは？」

「休み」

「それはわかるよ。病欠？」
「さあ？」

知らない、と返すソラに都は「家族じゃない」と問えば、ソラは肩をすくませて言った。

「ホントに知らないんだよ。俺、昨日まで家にいなかったから」
「え？」

「今日の朝、たたき起こされて髪、テン兄と同じ色にさせられて、学校に行けって言われたんだ」

「…誰に？」

「早祈姐」

早祈、とは確か彼ら三つ子の養い親で重音の母親の名前のはず、と思いい出して「お母さんに？」と言えば、ソラはギョツとした顔をした。

「な、何かまずいこと言った？」

「いや、母親だなんて言われたことないから」

一瞬寒気が、と返すソラに単純に言い慣れていないのと言われ慣れていないのかと都は納得する。

「養い親でも、お母さんであることには間違いないでしょ？」

「…って言っても、十歳も離れてないんだけど？」

あの人今年二十五歳だし、と返すソラのことばに都はえ？と目を丸くする。

「え？ だって重音ちゃんは…？」

甲斐天瀬やソラたちの妹重音。彼女は大体十歳くらいだとすれば早祈が重音を産んだのは二十歳前後、下手すれば十代ということになる。

「そんなに若くで重音ちゃん、産んだの？」

「産んでないよ」

「……………はあ？」

予想もしないソラの答えに都は目を丸くした。

「早祈姐と重音は血の繋がりはないし、重音と俺達も血の繋がりはない。もちろん、早祈姐と俺達にもない」

そう淡々と話すソラに都はただ呆然としながら彼の言葉を聞いていた。

「じゃあ、…養子？」

「重音はな」

「え？」

じゃあ甲斐くんたちは？ と問えば、ソラは首を横に振る。

「俺達は養子じゃない。だから姓も違う。——言っただろ？ 育ての親だって」

肉親でもなく、義父義母でもない。

ただ自分達を育てた、というよりも自分達の後ろ盾になってくれた。それがあの二人だとソラは言う。

その話を聞いて都は納得するが同時におかしなことに気付いた。

今までソラを含め甲斐天瀬や【ウミ】にすら、家族の話をされたことはないし、振っても全く相手にしてくれなかった。

なのに今は包み隠さず教えてくれる。

それが、不思議で。

「…どうして…教えてくれるの？」

赤の他人の自分に。

確かに知りたいとは思ってたけれど、教えてくれるわけがないと思ったから、諦めていたのに。

「別に？ 何となくいいかなって思ったんだ」

「ソラの、判断？」

「ああ。独断、だけど、別に後悔してない」

イインチョは俺達を蔑まないだろう？ と問うソラに「どうして蔑まなきゃいけないの」と思わず返す。

「甲斐くんには、尊敬という憧れがあるの。そんな人を蔑むなんて出て来る訳無いじゃない」

そもそも好きな人を蔑んでいる時点で、それはその人を好きではないということだと思う、と返せば、ソラは笑って。

「ホントに、テン兄のことが好きなんだね、イインチョ」

「え？ うん」

「テン兄が人殺しでも？」

「——は？」

唐突な、ソラのその言葉に、一瞬空耳かと思ってしまったけれど、それは間違いなくソラが発した言葉で。

「人…殺し？」

甲斐くんが？ と都が信じられないというように問えば、ソラはけど本当だよ、と何故か静かな笑みを浮かべて答えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9292f/>

紅い雪

2010年10月9日02時03分発行